

第28回 宮内孝久 神田外語大学第6代学長
言葉の学びが人生を楽しく生きる礎となる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



平成30（2018）年4月、神田外語大学第6代学長に宮内孝久氏が就任しました。商社マンとして国際ビジネスの最前線で異文化とのコミュニケーションを体現してきた宮内氏は「ビジネスとアカデミアの橋渡し」となることを目指しました。未曾有のコロナ禍での体験を経て、AIが人々の暮らしに大きな影響を与えようとしている今、外国語や異文化を学ぶ意義についてお伺いしました。（構成・文：山口剛）



私は大学卒業後、三菱商事に入社し、ビジネスの世界で40年間にわたり紆余曲折（うよきょくせつ）を経ながらも面白く生きてきました。退任後は第二の人生として日本の若者たちの眼力をもっと強くしようと思い、また、社会に対する恩返しができないかと教育界に転じ、横浜市教育委員に就いていたところ神田外語大学からお声を掛けていただき、幕張キャンパスへ見学にやって来ました。

その時、まず、強烈に印象づけられたのが神田外語グループの建学の理念「言葉は世界をつなぐ平和の礎」でした。そして、学生たちの笑顔。案内してくれた酒井邦弥前学長に「こんにちは」と彼女らが笑顔で挨拶をします。他の大学にも訪問しましたがこんな明るい挨拶は初めてでした。

この建学の理念が、コミュニケーションの重要性と難しさを身に染みて感じていた商社マンの琴線に触れたのです。

人と人は、モノを交換し、コミュニケーションをすることで分かり合います。ビジネスであれば、互いに必要としているから妥協点を見いだすことができる。でも、真の意味で分かり合うというのは難しい。



3人いれば3人の正義があり、10人いれば10人の正義がある。集団も同様です。

しかし、自分とは異なる正義や思想を持った人と分かり合うためには相当な努力と分かり合おうというマインドが必要です。「言葉は世界をつなぐ平和の礎」という建学の理念は実に的確にそのマインドを言語化していると感じました。

その理念がストーンとふに落ち、私は神田外語大学の学長を引き受けることにしました。

第28回 宮内孝久 神田外語大学第6代学長
言葉の学びが人生を楽しく生きる礎となる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



楽しく生きるための真のキャリア教育を

学長に就任する際に、私が強く思ったのは「ビジネスとアカデミアの橋渡しになる」ということでした。

大きな柱はキャリア教育です。単に企業とのパイプを強くして、就職率を上げるという意味ではありません。目指すべきは、人生を豊かに、楽しく生きることのお手伝いです。モットーは「面白おかしく元気よく」です。

人がモノゴトを自分で判断し、人生を選択できるようになるには、Liberal Arts的考え方、すなわち、哲学、文学、音楽や、論理的で科学的な考え方を身に付けるとよいと思っています。私は、世の中で言われているキャリア教育とはこれらの素養を身に付けて、いかに生きるかを考えるための教育と定義すべきと考えています。つまり、キャリア教育とは人が生きるうえで必要な基本的な知識教養と考え方を身に付けることなのです。

AIが席巻する時代にサイエンスのセンスは不可欠です。しかし、外国語やコミュニケーション、言語学を学びたくて入学した学生たちに物理や数学を学べと言ってもビックリしますよね。そこで、「デジタル・シチズンシップ」という入門講座のかたちで、情報についての学びを必修化しました。ちなみに数学者である河添健副学長が学生たちにサイエンスの面白さを教えてくれます。

キャリア教育センターの強化では、NHKの「ラジオビジネス英語」講座の名物講師も務める柴田真一教授にセンター長をお願いしました。国際的金融パーソンとして、ロンドンとフランクフルトに20年以上駐在されて世界の国際会議にて非常に高度な英語を使いこなす方が、センターの活動を盛り上げています。また、キャリア教育科目を必修にしたことで学生たちのキャリア形成への取り組みの底上げを図ることもできました。

私自身は「学長講座」を担当しました。長年、商社で築き上げてきたネットワークを生かし、国際的に活躍するビジネスパーソンにも講義をしていただきました。神田外語大学は7割が女子学生ですので未来に向かって学ぶ女性たちが、幸せな人生を切り拓くためのロールモデルとして女性講師に登壇してもらいました。

ガラスの天井を破って活躍している方ばかりですが、皆さん、それぞれに苦勞をされている。とてもすてきな笑顔で話をしてくれるけれど、その背景には並々ならぬ努力がある。女子学生たちに、その現実を知ってほしかった。苦勞はするけど、トライした方がきっと人生は楽しくなる。そういう思いで、講義をお願いしました。

ちなみに失敗して後悔するよりも、挑戦しなかったことを後悔することって結構あります。私の場合、留学をしなかったことを今でも悔やんでいます。



第28回 宮内孝久神田外語大学第6代学長
言葉の学びが人生を楽しく生きる礎となる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



コロナ禍が後押しをした教育の進化

学長2年目が終わろうとしていた令和2（2020）年2月、新型コロナウイルスの感染拡大が本格化し始めました。今思えば、コロナ禍は人類の歴史でもパラダイムシフトと言える大きな出来事だったと思います。

コロナ禍以前、神田外語大学をはじめとする国際系の大学は、グローバルゼーションによって、モノとヒトの流れが自由に行われることを前提に教育プログラムを組んでいました。その柱のひとつは留学です。外国へと飛び出し、現地で言葉や文化を学ぶ。コロナパンデミックによって、これが一気に崩れました。

それどころか、移動が制限され、学校にすら来ることができない。私が念頭に置いたのは、いかなる環境においても「私たちの教育活動は止めずに継続するんだ」という強い決意でした。

私は、以前から日本のDXは世界と比べると2周ぐらい遅れていると感じていました。だから、コロナによる制限は、日本のDXを進める大きなチャンスだと捉えて、他大学に先駆けて教育のオンライン化施策を打ちました。この分野が得意な教職員のリーダーシップのもと、2020年の新年度から途切れることなくオンライン教育を導入することができました。

コロナ禍は、私たちに「世の中は思い通りにいかない」ことを改めて教えてくれました。何が起きても正面から受け止め、乗り越えていくしかない。さまざまな不自由はあったかもしれないが、それを乗り越えられたのはいい試練になったと思います。

そして、副次効果として、「いつでもどこでも世界とつながれる」というオンラインの恩恵を肌で感じられました。コロナ禍がなければ、計画的にオンライン化を進めても、これほどの実感を得られたかどうかは定かではありません。コロナは災いであり、外圧であるけれど、新しいコミュニケーションの在り方を学べた機会だったと捉えています。

私自身は、YouTubeを使って学生たちにメッセージを発信し続けました。本学は、コミュニケーションを専門とする大学です。コロナ禍で何かを学生たちに伝えるのであれば、公式な文章を発表するのではなく、プライベートな感覚で触れられるSNSもいいと思い、YouTubeを活用しています。

でも、実際に取り組んでみるとは本当に発信は難しい。なかなかアクセスも増えない。それもやってみたから分かることです。難しいということを確認したうえで、コミュニケーションに挑戦していくのが、本学の姿勢ですからね。



神田外語とともに歩んできた人々の証言

第28回 宮内孝久 神田外語大学第6代学長
言葉の学びが人生を楽しく生きる礎となる



地域への貢献が学生たちの学習意欲を高める

神田外語大学は令和7（2025）年10月、千葉県と官学連携協定を締結しました。この協定は、県内における外国人の活躍支援や多文化共生の推進を通じて、地域の活力向上に寄与することを目的としたものです。

千葉県は神田外語大学にとって素晴らしいフィールドだと考えています。例えば、日本に移住してきた外国籍の子どもたちが学校になじんでいけないとき、本学でその国の言語や文化を学ぶ学生たちがお手伝いすることができます。

そのお手伝いを通じて、貢献を実感できれば、言語や文化を学ぶ意欲につながっていきます。人に尽くすことが自分のためになる。まさに、「情けは人のためならず」ということわざ通りです。こんなにありがたい機会はありません。

これが実現しているのは、学生たちが積極的に外に出ていこうという姿勢があるからです。教職員が少しだけ道案内をすれば、自分から外に出ていく。これは本学の校風です。

神田外語グループは、70年に及ぶ歴史の中で、アカデミアに閉じこもるのではなく、常に現場と接点を持って行動することを基本としてきました。寺山修司の「書を捨てよ、町へ出よう」ではありませんが、「まず行動してみよう」という風土こそ、神田外語のアセット（財産）なのです。



神田外語とともに歩んできた人々の証言

第28回 宮内孝久 神田外語大学第6代学長
言葉の学びが人生を楽しく生きる礎となる



生きるための知恵、リベラルアーツを身に付ける新学部を開設

令和3（2021）年4月、グローバル・リベラルアーツ学部（以下、GLA学部）が新設されました。世界の課題を解決することをミッションに、文理が融合した教養を身に付けるとともに、在学中2回の留学で世界の実情を肌で感じ、外国語の運用能力を高めることをコンセプトとした学部です。

私はよく、「語学はすてきな入り口」という表現を使います。まず、語学学習に取り組むと、学んだ時間に応じて成果が出ます。成果を実感し、自信を覚えて、学習習慣を身に付ける楽しみを知る。

そして、語学をてこに世界に飛び出していく。その学びによって、日本や日本語に関心を持つようになり、平和な環境で学べることへの感謝の気持ちも生まれていくのです。

GLA学部はまさに、生きるための知恵であるリベラルアーツを身に付け、ビジネスや国際協力の現場で活躍できる学生を輩出することを目指す、極めて意味のある学部だと思います。

リベラルアーツは暗記するものではありません。情報の暗記はAIに任せておけばいい。私たち人間の仕事は、未来を想定して、そこからバックキャスト（逆算）し、今、何をやらなければいけないかを定めることなのです。



「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第28回 宮内孝久 神田外語大学第6代学長
言葉の学びが人生を楽しく生きる礎となる



優れた英語教員が育つ環境が本学の強み

神田外語大学の地域貢献のひとつは、千葉県で200名以上に及ぶ英語科教員を輩出していることです。本学の卒業生は、英語指導のうまさでも定評があります。

大きな要因は、学生たちが学ぶ環境にあると言えるでしょう。本学で英語を教える教員の半数以上はネイティブスピーカー。欧米だけでなく、英語以外のアジア言語、スペイン語、ポルトガル語を母語とする先生方との接触の機会も豊富です。東南アジア系の先生方も多くいます。学生たちは自然に英語を使える環境で実践的な英語を学んでいます。その環境で自分自身が楽しく学んでいるからこそ、「神田外語大学出身の先生は教え方がうまい」という評価につながっているのだと思います。

今の高校生の気質とはどんなものか。高校における教育の課題は何か？そこを認識したうえで、大学の教育はどうあるべきかを考える。そういったヒントをもらいに、私は多くの高校を訪問してきました。そして、訪問した時に「神田出身の先生方は教えるのがうまい」と聞くと、本当にうれしくなります。



神田外語とともに歩んできた人々の証言

第28回 宮内孝久 神田外語大学第6代学長
言葉の学びが人生を楽しく生きる礎となる



AI時代だからこそ言葉を学ぶ意義がある

世界は今後、AIの活用を前提とした社会へと進んでいく、AIが人間を支配する恐ろしい時代になるかもしれません。あえて強い言葉で言うとAIの奴隷にならないよう、主体的に生きるために言葉を学び続けなければいけません。

私たちは、言葉を学び続けることで「自分は今何を感じているのか」「何が大事で、何に違和感があるのか」ということを自分の言葉で説明しようとしますがこれが難しい。それができる人は誰かが用意したシナリオや「こう考えなさい」という枠組みに流されることなく「本当に自分で決めていることなのか？」と立ち止まることができます。

逆に、言葉にする訓練ができていないと選ばされているのに「自分で選んだ気」になりやすい。あえて強い言葉で言うならば言葉を持たない人はAIの奴隷になりやすいのです。ここでいう「主体性」とは気合や根性のことではありません。自分の経験や違和感をいったん言葉にして考え直す力のことです。いわゆる、Critical Thinkingです。

実際、外国語を学ぶと「世界ってこういう切り口もあるんだな」と何度も思い知らされます。モノゴトの見方はひとつじゃないということを否応なく体験させられます。だから、外国語は単に通じ合うための道具ではないのです。自分で批判的に考え続け、決め続けるための、そしてAIの奴隷にならないためのトレーニングなのです。

AIにはできない部分があります。例えば「問いを立てる」ことは既存の枠組みの中においてはAIの方が得意でしょう。一方で「ぬくもり」「空気を読む」、そして、「覚悟を持つ」「意思決定をする」「責任を取ること」、つまり「引き受ける」ことは人間の存在そのものです。人間は、情念を発露として問いを立てるのです。

人間の存在とは何か。そのひとつは「言葉」です。外国語を学ぶことは、異なるさまざまな文化を学ぶことであり、最終的には母語を、自国の文化を、そして我を知ることにあります。

我を知る。それは、自分の「生き方」を知ることでしょう。AIに教えられるのではなく、自ら考え、学び、悩み、対話し、そして納得する。ふに落ちる。言葉を学ぶことで、誰にも奪われない生き方、そして信念を手に入れることができるのです。

さて、言葉を学んだ私たちは「平和の礎」となれるのでしょうか。紛争は太古の昔から、今、この瞬間まで続いています。今後も決して収まることはないでしょうが、解決しようとする意志が大事なのです。

紛争の解決にはコミュニケーション力が必要です。そして、役割に応じた専門知識と、背景を理解する教養が必要です。国際社会で当事者を説得するには、法律の知識、歴史の知識、そして合意形成に関する訓練が必要でしょう。

外国語による高いコミュニケーション能力と、世界の平和を実現するために必要な能力を養う場をつくっていく。その学びを確立できれば、神田外語大学は、とてもとがった、光り輝く大学になっていくと思います。



第28回 宮内孝久神田外語大学第6代学長
言葉の学びが人生を楽しく生きる礎となる

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



“Beyond Language”

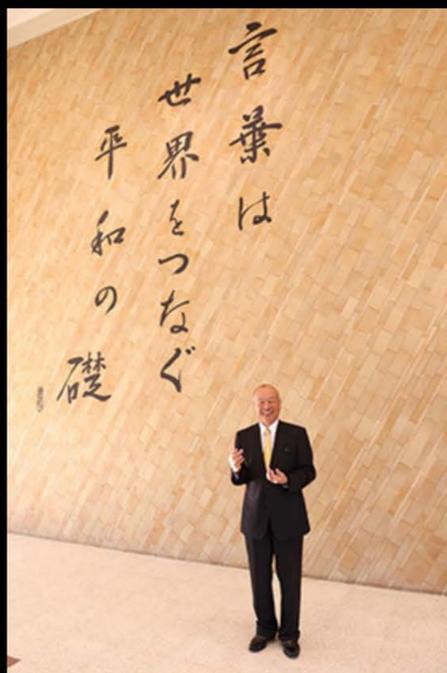
神田外語大学では、ビジネス系の学部開設を目指しています。外国語を学び、その延長線上の国際的ビジネスセンスを学ぶ。それが“Beyond Language”の意味するところです。英語だけでなく、さまざまな国の言語も学べる。その言語圏の人々とビジネスをするには何が必要か。社会で実践する前に学ぶことができるカリキュラムを構築します。

学びの主体は学生です。アクティブラーニングやPBL（Project Based Learning：問題解決型学習）と呼ばれる学習手法ですが、私は一貫して「主体は学生で、教員は学びのヒントやアドバイスを出すアドバイザーに徹してほしい」とお願いをしてきました。

学生たちは、友人と勉強し、自分とは異なる価値観を持つ相手と対話しながら学んでいきます。ビジネスの世界でも異業種との交流からイノベーションが生まれるのと同様です。

対話を通じて、自分の主観を認識する。それは、いわば自分の心です。自分が好きなことは何か？ 自分が信じていることは何か？ その疑問について考え、対話し、対話する技術を習得するのです。

学生たちに、言語教育（Language Education）を起点に価値観、文脈、行動までを含めてCommunication力、Critical Thinking力を鍛え、さらにBeyond Language for Business and Societyを実践できる場を用意するのが我々、大人の使命であり、神田外語大学の役割だと思います。その場での学びの積み重ねこそが、「言葉は世界をつなぐ平和の礎」となっていくと私は考えています。



宮内孝久（みやうちたかひさ）

1950年9月、東京生まれ。1975年3月、早稲田大学法学部卒業。同年4月、三菱商事株式会社入社。サウジアラビア駐在時に湾岸戦争に遭遇。1996年、メキシコ政府との合併企業（ESSA）出向。2009年、役員、2013年、三菱商事代表取締役副社長就任。2016年、同副社長を退任後、神田外語大学特任教授就任。2018年4月、神田外語大学第6代学長に就任。国連UNHCR協会理事長、横浜市教育委員などを歴任。2026年3月、同学長を退任。

